

甲西町文化財調査報告

# 上ノ東遺跡

—甲西町塚原上ノ東遺跡発掘調査報告書—

1986

甲西町教育委員会

## 序 文

甲西町大字塚原字上ノ東地区は甲西町の西北部に位置する。甲西町では県の単独事業で昭和47年度より畠地帯総合土地改良事業に取り組んできました。昭和60年度事業に伴い、支線第7号道路の建設計画が、県土地改良事務所より提出されました。

甲西町教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地調査指定地に基づき、上ノ東遺跡の発掘調査を実施することになりました。

その結果から、約4500年前～1700年前の住居跡が確認され、縄文、弥生の土器が多数出土発見されました。

これらの貴重な資料は、過去から現在そして未来を結ぶ「かけはし」として大きな意味をもつものと考えられます。

最後に、上ノ東遺跡埋蔵文化財の発掘調査及び報告書作成に御協力頂いた「楠形町」をはじめ多数の皆様に感謝申し上げます。

昭和61年3月20日

甲西町教育委員会

教育長 内藤 貞次

## 例　　言

- I 本書は爛地帯総合土地改良事業に伴う上ノ東遺跡発掘調査報告書である。
- I 発掘調査は昭和60年10月1日から同年10月末日まで実施した。出土品の整理等は昭和60年11月1日から61年3月20日まで行った。
- I 発掘調査組織　　調査主体－甲西町教育委員会・甲西町文化財審議委員会  
調査担当－清水博（柳町教育委員会）  
調査員－関口昌和  
事務局－内藤貞次（教育長）塩沢忠（社会教育課課長）  
深澤晴夫（社会教育課係長）　藤巻和彦（社会教育課主事）
- I 本報告書作成の業務分担は下記の通りである。  
遺物の実測　清水、小林、白居、小口　　遺物のトレース　出口、白居、清水  
遺物観察表の作成　小口　　遺構図版の作成　出口
- I 本書の編集は清水が行った。執筆の文責は別項に記したが、主要な分担は次の通りである。  
遺構－清水　　遺物－白居　　写真撮影－清水
- I 発掘調査、遺物整理において下記の方々に御助言、御協力を頼いた。記して謝意を表する次第である。
- 教育委員　田中達哉、石川修三、保坂政文、青木一郎  
文化財審議委員　杉山松雄、飯澤三千雄、井上栄一、藤巻信、望月勝江  
県教委文化課　末木健、新津健  
県埋蔵文化財センター　田代孝、米田明訓、坂本美大、中山誠二、保坂康夫
- I 調査参加者  
白居直之（中央大卒）　小口妙子（奈良大卒）　小林宇亮（東海大卒）　出口真由美（武藏野美術大学卒）　秋山昌寛、樋川重行、伊藤淳司、小笠原淳、川名富美子（山梨大）　野中新一、清水しづか、青木みどり、野中つる江、伊藤与志恵、中沢栄、深沢道子、齊藤みや子　河野節子、功刀兼子、上田みな子
- I 発掘調査時に作成された図面及び出土遺物は甲西町教育委員会に於いて保管している。

## 凡　　例

1) 遺構Noは原則として確認順である。

2) 採図縮尺は原則として次の通りである。

住居址-1/40・1/60、同炉址-1/30・1/20、土坑-1/30、溝状遺構-1/40

土器実測図-1/4、同拓映-1/3、石器-1/4、石製品-1/2

3) 遺構図版における指示について。

遺構図版の水系レベルは海拔高を示す。

方位は磁北を示す。

主軸方位は、主軸線と磁北とのなす角度で示す。

図版中 一・一は床面残存部、一…一は炭化物範囲を示す。

スクリーントーン・インスタンスレタリングの指示は次の通りである。

一焼土 ●一石製品

遺物番号は 本文、採図、表、図版、と一致する。

平面図中に図示した遺物は、すべて床面上及びピット内から出土したものである。

4) 土層説明について、説明文中における含有物はその含有量の多い順に記してある。

## 執　筆　分　担

第Ⅰ章第1節

杉山 松雄

第Ⅰ章第2節（発掘工程表）

上田みな子

第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章（遺構に関する記述）

清水 博

第Ⅳ章（弥生時代の遺物の記述・表）

小口 妙子

第Ⅳ章（繩文時代の遺物の記述）

小林 宇壱

第Ⅴ章第1節

白居 直之

第Ⅴ章第2節

清水 博

# 目 次

## 序 文

## 例 言

第 I 章	調査経過	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	発掘調査の経過	2
第 II 章	遺跡の概観	3
第 1 節	地理的環境	3
第 2 節	歴史的環境	3
第 III 章	調査の概要	9
第 1 節	調査の方法と成果	9
第 2 節	層 位	10
第 IV 章	発見された遺構と遺物	10
第 1 節	住居址	10
第 2 節	その他の遺構	31
第 3 節	遺構外の遺物	33
第 V 章	成果と課題	34
第 1 節	出土土器の様相について	34
第 2 節	まとめにかえて	35

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図、周辺遺跡分布図 〔1/25000〕	4
第2図	遺跡地形図〔1/5000〕	5
第3図	遺構配図〔1/400〕	7・8
第4図	1号住居址、同炉址〔1/60、1/30〕	11
第5図	1号住居址掘り方〔1/60〕	12
第6図	1号住居址出土土器〔1/4、1/3〕	13
第7図	2号住居址、同貯蔵穴〔1/60、1/30〕	14
第8図	2号住居址掘り方〔1/60〕	15
第9図	2号住居址出土土器〔1/4、1/3〕	16
第10図	4号住居址、同掘り方、同炉址及び5号 住居址〔1/60、1/30〕	18
第11図	5号住居址掘り方〔1/60〕	19
第12図	4号住居址出土土器〔1/4、1/3〕	19
第13図	5号住居址出土土器〔1/3〕	19
第14図	6号住居址、同掘り方、同炉址 〔1/40、1/20〕	20
第15図	6号住居址出土土器〔1/3〕	21
第16図	7号住居址出土土器〔1/4〕	22
第17図	7号住居址同掘り方及び遺物分布図 〔1/40・1/20〕	23・24
第18図	7号住居址出土土器〔2〕〔1/4〕	25
第19図	7号住居址出土石製品〔1/2〕	26
第20図	8号住居址、同掘り方〔1/40〕	27
第21図	8号住居址出土土器〔1/4、1/3〕	28
第22図	3号住居址〔1/40〕	29
第23図	3号住居址ピット同炉址〔1/40、1/20〕	30
第24図	3号住居址出土遺物〔1/4・1/3〕	31
第25図	1号土坑及び2・3号土坑〔1/30〕	32
第26図	1号溝状遺構〔1/40〕	33
第27図	遺構外出土の遺物〔1/4、1/3〕	34

## 表 目 次

第1表	発掘調査の工程	2
第2表	1号住居址出土土器計測表	12
第3表	1号住居址出土土器観察表	13
第4表	2号住居址出土土器計測表	16
第5表	2号住居址出土土器観察表（1）	16
	2号住居址出土土器観察表（2）	17
第6表	4号住居址出土土器計測表	17
第7表	5号住居址出土土器計測表	19
第8表	4号住居址出土土器観察表	19
第9表	5号住居址出土土器観察表	19
第10表	6号住居址出土土器計測表	21
第11表	6号住居址出土土器観察表	21
第12表	7号住居址出土土器計測表	22
第13表	7号住居址出土土器観察表（1）	25
	7号住居址出土土器観察表（2）	26
第14表	8号住居址出土土器計測表	28
第15表	8号住居址出土土器観察表	28

## 写 真 図 版 目 次

図版I	遺跡全景、発掘参加者
図版II	1号住居址、2号住居址
図版III	3号住居址、4・5号住居址
図版IV	6号住居址、7号住居址、8号住居址
図版V	1号溝、1号土坑、2・3号土坑
図版VI	1号出土土器、2号出土土器、 7号出土土器
図版VII	7号出土土器
図版VIII	3号出土遺物、7号出土石製品

# 第Ⅰ章 調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

甲西町上ノ東遺跡は、甲府盆地の西南、中巨摩郡甲西町大字塚原字上ノ東地内にある。本地は、中巨摩郡橿形町中野、上野、甲西町湯沢、塚原にまたがる急傾斜の畠地帯である。市之瀬台地丘陵部に属し起伏が複雑な地形で、その大部分は桑園である。この丘陵地帯は、標高400mで古来から西郡と呼ばれる峠西地方の一角で、地味豊かな桑園を主体として静かな山村のたたずまいをみせている。

国上資源を含めて、環境保全、生活優先等の角度から農業の近代化と農村整備による新しい地域社会の建設を目指す。

時に、この地域のような傾斜地農業は農道等の整備を中心に労働の生産性を高めたり、機械化による高能率の生産基盤を作りあげるよう整備する必要が求められる。この様な基本計画を基に、甲西町教育委員会に対し岐阜土地改良事務所より60年1月に道路改良計画の申請が提示された。

甲西町教育委員会では、道路改良工事計画の場所が埋蔵文化財包蔵指定地であることを確認し、甲西町文化財審議委員会に諮った。同文化財審議委員会を3回開催し文化財保護法に基づいて埋蔵文化財発掘調査を行う計画をたてた。発掘場所については耕作者が橿形町内在住者であり、道路工事申請も橿形町からの要望という経過のなかで、甲西町教育委員会は橿形町教育委員会と協議に入り打合せ会を重ねて、お互いの協力態勢のもとに実施することとした。甲西町及び同町議会の御理解を頂き、九月補正予算に520万円を計上して埋蔵文化財発掘事業が進行した。

甲西町教育委員会では、発掘調査にあたり文化財審議委員会を中心に発掘準備に入り、橿形町教育委員会からの専門職員の派遣協力を得て、発掘に入った。道路建設面積約1400m<sup>2</sup>の発掘調査を進めていくなかで、縄文時代から弥生時代までの遺構・遺物が発見された。縄文時代の住居跡1ヶ所、弥生時代の住居跡7ヶ所と、それぞれの時代に属する土器類が多数出土した。

甲西町教育委員会、同町文化財審議委員会、他関係者で10月12日、11月2日に現地調査及び視察を行なった。発掘調査は予定期日の10月31日に終了した。昭和60年11月1日～昭和61年3月31日までの5ヶ月間の日程で、土器の復元等の整理作業や、調査報告書の作成に着手した。

甲西町文化財審議委員会では、現地調査や山梨県教育委員会の指導を得て、発掘調査で得られた出土品については保存し活用していくよう考えている。

最後に、今回の発掘調査については「橿形町」をはじめ地元耕作者、他関係諸機関の皆様に御支援・御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査は昭和60年10月2日に開始した。発掘区東端から西方へ向い、重機による耕作土排土の後、人力によって精査、遺構掘り下げを行った。

調査は10月31日無事完了したが発掘期間中、10月15日には、県土地改良事務所の視察を、また10月26日には小笠原小学校郷土クラブの皆さんとの見学、参加を得た。

調査は10月31日に無事完了し、同日現場を撤収した。

現地での調査工程は以下の表の通りである。

第1表 発掘調査の工程

月 日 造査名	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
表土排土	←→																												
I 区精査	←	→																											
1号住	←																		→										
2号住	←																			→									
3号住	←																				→								
1号土塙	←																					→							
2号土塙	←																					→							
3号土塙	←																					→							
1号溝	←																					→							
II区精査	←																					→							
4号住	←																					→							
5号住	←																					→							
6号住	←																					→							
7号住	←																					→							
8号住	←																					→							

一方、出土品等の整理は60年11月1日から61年3月20日まで行なった。

## 第II章 遺跡の概観

### 第1節 地理的環境

上ノ東遺跡は中巨摩郡甲西町塚原字上ノ東に所在する。甲西町は甲府盆地の西縁にあたり、盆地を南一北に弧を描きつつ貫流している釜無川の左岸に位置する。

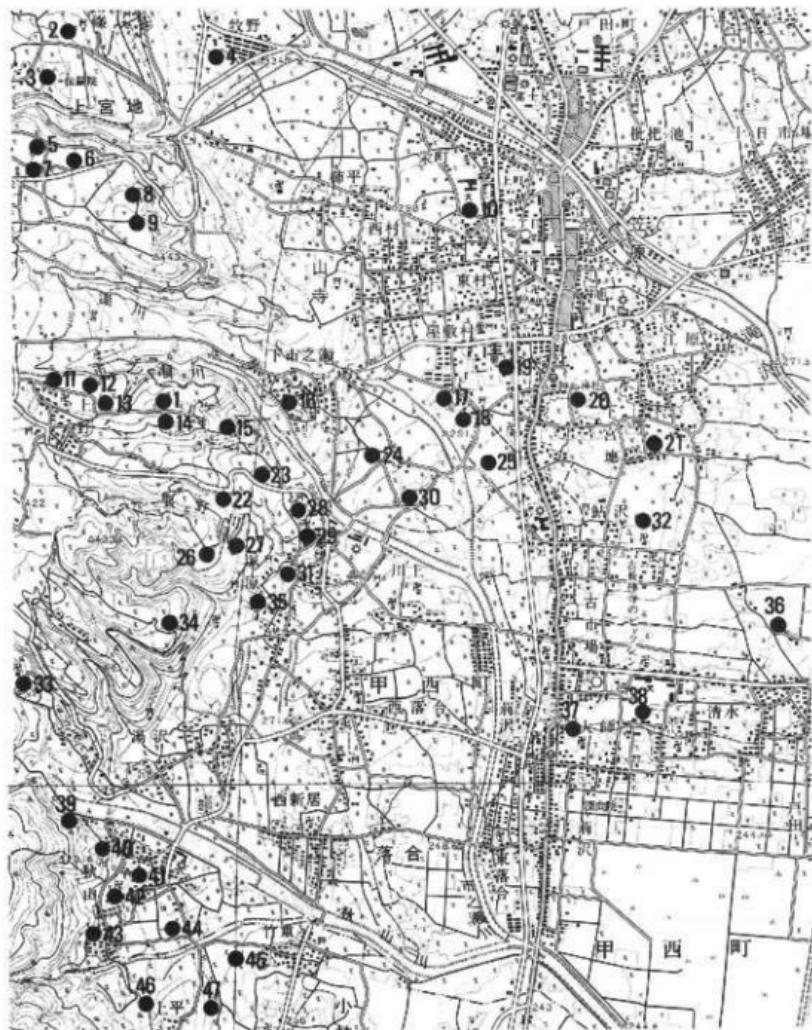
町内西半部は柳形山麓とその前面に発達した市之瀬台地が占め、中央部は巨摩山地から流れ降った河川が盆地床緑辺に形成した扇状地形となっている。扇状地端部は若草町から続く湧泉列をなしており、町内東半は湧泉列からのびる氾濫原となり釜無川と接している。柳形山は南部フォッサ・マグナ地帯に属する巨摩山地の中心部を占めるが、その東麓にはいく本かの断層線が存在する。扇形に展開する市之瀬台地も伊奈ヶ湖断層前面に発達した洪積扇状地（上野山扇状地）が甲府盆地形成に与った最も新しい地殻変動を受けて形成された丘陵状の地形である。台地面は南北4km、東西2.5kmの規模をもち、標高は400～500mを示している。台地前面は比高差100～120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床へ下降するが、先端部は断層運動に伴って逆に上昇した円頂丘がならんでいる。円頂丘は北から六科丘、上野山、御巣山と呼ばれているが、円頂丘から西側は緩やかな逆傾斜面を経てなだらかに西方山麓に向い順次高まっていく。

台地上面には深沢川、漆川、市之瀬川、堰野川などが小谷をきざみ、谷の出口には扇状地を造っている。これらの扇状地は御動使川の形成する扇状地と相まって「複合扇状地」形をなしているが、その扇端部は湧泉列となり、扇状地と氾濫原との明瞭な境界となっている。この湧泉列は若草町の鏡中条・十日市場から続き、江原、古市場、鮎沢、西落合へと弧状をなしている。この湧泉列より低位は豊富な自噴井が認められ氾濫原となっている。

上ノ東遺跡は市之瀬台地中央南寄りにある上野山丘陵北側緑辺に占地している。上野山丘陵は北は市之瀬川、漆川によって南は北沢川によって開折された谷に挟まれているが、遺跡は丘陵北緑辺に占地し、眼下に望む市之瀬川を隔てて、六科丘遺跡を望んでいる。また、市之瀬川に流れこむ小谷を隔てて西方には上の山遺跡が、東方には東原遺跡（註1）が存在する。從って上野山丘陵北緑辺には東から東原、上ノ東・上の山と縄文時代中期・弥生時代末期の遺跡群が存在して六科丘遺跡と対峙している。更に遺跡から南へ20m程昇った上野山円頂丘上には上ノ東古墳が占地しており、東へ一段降った丘陵先端には物見塚古墳が占地している。

### 第2節 歴史的環境

甲西町内では、1981年に発掘調査を受けた住吉遺跡（註2）（古市場）をはじめとして、30ヶ所程の遺跡が知られている（註3）。



第1図 遺跡位置図、周辺遺跡分布図 [1/25000]

1-上ノ高遺跡 2-高入遺跡 3-仁賀原遺跡 4-平野遺跡 5-大野人遺跡 6-大野人遺跡 7-五所山遺跡 8-六所山遺跡 9-六所山遺跡 10-六所山遺跡 11-鶴見河岸跡 12-七所山遺跡 13-下山遺跡 14-上ノ高古墳 15-物見原古墳 16-大原遺跡 17-白原1遺跡 18-白原2遺跡 19-鶴見北1号墳 20-寺原2号墳 21-久保云遺跡 22-坂上遺跡 23-坂上遺跡 24-坂上遺跡 25-御山遺跡 26-上ノ平遺跡 27-九鬼古墳 28-天保方墳 29-佐佐木遺跡 30-櫛原上村古墳 31-三井2号古墳 32-船岡古墳 33-上ノ古墳 34-一ノ山古墳 35-二ノ山古墳 36-三ノ山古墳 37-古市地古墳 38-清水遺跡 39-一ノ山古墳 40-魚野海岸遺跡 41-鶴見古墳 42-鶴見古墳 43-竹林遺跡 44-大川遺跡 45-千代竹林遺跡 46-日本水道跡 47-平野遺跡



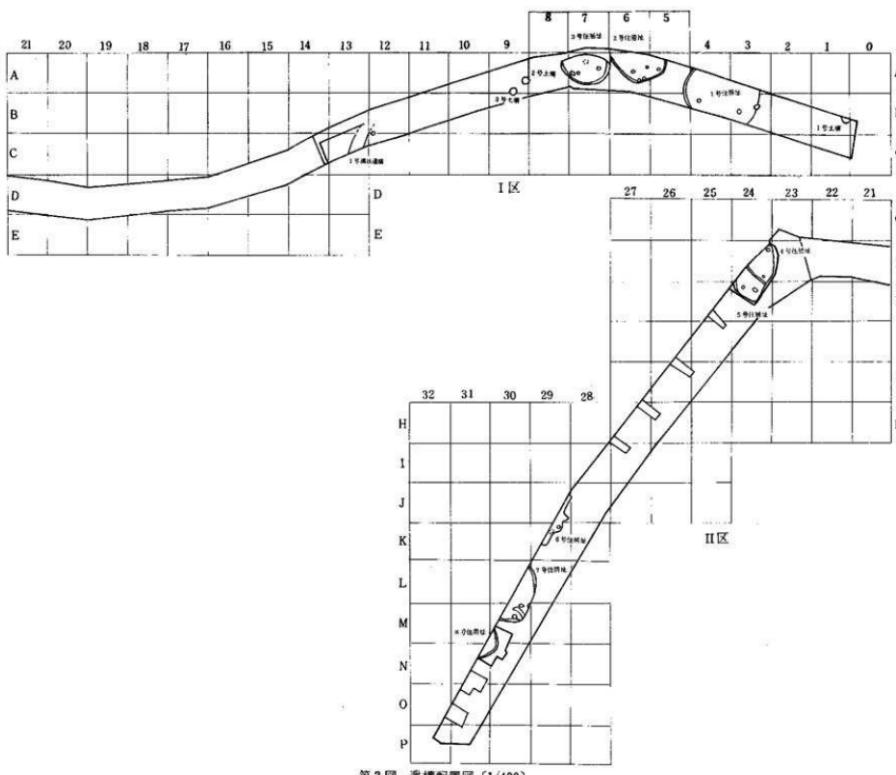
第2図 遺跡地形図 (1/5000)

前節で述べた様に甲西町地内は地勢的に大きく三様に分けられるが、遺跡の分布も地理的環境に規制されて特色ある様相をもって展開している。まず縄文時代の遺跡は町内西半を占める櫛形山麓からその前面に形成された市之瀬台地に立地している。次いで弥生時代の遺跡は市之瀬台地縁辺部から、扇状地上に展開し、更に弥生時代終末から古墳時代初頭の遺跡は町内中央部の扇端部湧泉列上への高地に進出している。古墳時代後半から奈良・平安時代に至ると、湧泉列上から町内東半の汎濱原へ、更に再び台地上へと拡散する分布を示す。古墳の分布は、上野山、塚原山等の台地先端に前期古墳が、塚原等扇状地上に後期古墳が占地している。

ここでは町内の主要な遺跡をいま少しお見してみたい。秋山にある土居平遺跡は城山の東緩斜面中の平坦地に立地している遺跡である。縄文時代中期の遺物（土器、石器）を中心として、同前期から弥生時代を経て古墳時代まで断続的に続く複合遺跡である。他に縄文時代の遺跡としては塚原地内の見喰場遺跡<sup>⑩</sup>も縄文時代早期から同前期、弥生時代、古墳時代までの遺跡である。他に秋山の熊野神社遺跡<sup>⑪</sup>などが存在するが、北隣櫛形町では中野、上野、平岡と続く市之瀬台地に多くの縄文時代遺跡が存在している。

弥生時代に入ると湯沢の御前山遺跡<sup>⑫</sup>が丘陵に占地する遺跡として知られており、上ノ東遺跡も、従来から弥生時代に属する遺物の散布地として記載されていたものである。丘陵から扇状地に所在する弥生時代遺跡としては、塚原の住村遺跡<sup>⑬</sup>、秋山の大明神遺跡<sup>⑭</sup>などがあげられるが、湧泉地帯に降ると古市場の若宮神社周辺（住吉遺跡）<sup>⑮</sup>、清水の清水遺跡<sup>⑯</sup>（註4）が存在する。住吉遺跡は1981年に甲西町教育委員会による調査を受けているが、弥生時代後期後半に属する住居址1軒、方形周溝墓1基が確認されており、駿河地方の影響を強く受けた土器群とともに注目される遺跡である。町外に目を転ずると、上ノ東遺跡の西方200m程には弥生時代終末の住居址6軒と方形周溝墓様の溝状造構4本が検出された上の山遺跡<sup>⑰</sup>（註5）が、谷を隔てて六科丘には弥生期終末の住居址33軒などからなる六科丘遺跡<sup>⑲</sup>（註6）が存在している。若草町の鏡中条・十日市場から続く湧泉列上（註7）に占地する江原の久保沢遺跡<sup>⑳</sup>、下宮地遺跡<sup>㉑</sup>、鈴沢遺跡<sup>㉒</sup>などからは弥生時代終末から古墳時代にかけての遺物が多く採集されている。

一方、古墳は台地上から扇状地上に占地している。町内西半の市之瀬台地先端に前期古墳が築造されている。まず櫛形町地内であるが、上の山丘陵先端に5世紀代前半に比定される物見塚古墳（前方後円墳）<sup>㉓</sup>（註8）が、六科丘から北へ延びる小尾根上には六科丘古墳<sup>㉔</sup>（註9）が占地する。甲西町内に目を戻すと、上ノ東遺跡から南へ20m程のぼった円頂丘上には上ノ東古墳が占地している。上野山丘陵の南に対する塚原山山頂には刀塚（註10）があったがすでに消滅している。更に南へ降った秋山には円筒埴輪を持つ熊野神社古墳<sup>㉕</sup>（註10）が存在している。上野山丘陵を一段降った扇状地上には横穴式石室を内部主体とする後期古墳が認められる。上村古墳<sup>㉖</sup>（註10）が存在する塚原は、その字名が示す様にかつて多くの塚（古墳）が存在し、石室等も確認（註10）されている様であるが現在は失なわれている。隣接する櫛形町下市之瀬にも鎧物師屋古墳<sup>㉗</sup>（註11）がかつて確認されているが、これも現在は消滅している。ともあれ、下市之



第3図 造構配置図 (1/400)

漸から塚原へ至る扇状地上にはかつて多くの後期古墳が存在していたとされるが、現在確認されるものは僅か数基を残すのみである。

さて、湧泉列のみられる甲西町、増穂町一帯は和名類聚抄に所載される「大井郷」にも比定されており、田高地区一帯には条里遺構<sup>10</sup>が埋没しているとも伝えられている。また考古学的に確認されているものではないが、南湖(奈古)・秋山(甲西町)小笠原(櫛形町)などは甲斐源氏の一族がその居館を定めた地ともいわれ、城山には秋山氏が営った雨鳴城(註12)がその痕跡を残している。

以上の様に甲西町内にも多くの遺跡が知られているが、その内容が明らかにされたものは少なく、今後、町内の遺跡の全体的な把握と、調査、研究の積み重ねによって甲西町の歴史の一端が解き明かしていくものといえよう。

## 第III章 調査の概要

### 第1節 調査の方法と成果

今回の調査は農道整備事業に伴うもので、巾5m、延長350mに亘る。丘陵北縁に沿って、200m程東—西に延び、西端で急角度に折れ、南西方向へ150m程続いている。発掘調査に先立つ踏査によれば、その中央部は旧農道開設時にかなりの削平を受けていた。従って発掘区は東端部約55m、西半部60mあわせて120m程とし、前者をI区、後者をII区と呼称した。

調査の方法はグリッド法を探った。工事用基準杭を利用し、磁北に従って発掘区全体に4m方眼のグリッドを設定した。グリッドは南—北方向に北からA～P、東—西方向に東から0～32と定め、例えば、1-A区、31-P区と呼称した。

調査は機械力と人力とを併用した。重機によって第I層(耕作土)を20～40cm程堆上した後以下の層を人力で精査し、遺構、遺物の検出に務めた。

人力による精査はI区東端から西方へ向って行った。本来の遺構面と考えられる第II層、もしくは第III層上面はかなりの削平を受け、遺構、遺物の遺存状態は必ずしも良好とはい難かった。また発掘区の幅員の関係もあり、完掘した遺構はごく僅かであった。しかしほば1ヶ月に及ぶ調査の結果、多くの遺構、遺物を検出した。検出した遺構は住居址8軒(縄文時代1軒、弥生時代7軒)・土塙3基・ピット若干(共に時期不明)であり、遺物に認められる年代巾は縄文時代早期から中世にまで及んでいる。調査は多くの成果を残し、10月31日に完了した。

## 第2節 基本層位

上ノ東遺跡の基本層は以下の通りである。

第I層 耕作上層（茶褐色弱粘質土層）

第II層 暗茶褐色粘質土層

第III層 明茶褐色土層（ローム層）

第IV層 黄白色輕石層

第I層は20~50cmの厚さを持つ。第II層はI区の中央部にのみ認められたもので厚さは5cm内外である。本来は発掘区全体により厚く堆積していたものであろうが、耕作、農道開設等により削平を受けたものと思われる。第III層は50~100cm堆積するが、これも第II層と同様、本来は100cm内外の厚さをもつものであろう。第VI層、古御岳出来の第1浮石層（Pm-1）である。

本遺跡における包含層は、ほぼ全体に亘り削平を受けている。おそらく弥生時代の遺構面は第II層中位～下位、縄文時代のそれは第II層下位～第III層上面と考えられるが、ほぼ全面に亘り削平を受けていた。

前述した様に工事区の中央、4-C区～22-C区にかけては、第IV層上面まで削平が及んでいた。また23-C区以南も、著しく攪乱を受け、発掘区西壁に沿って部分的にローム層が残存していたに過ぎない。從って本遺跡で検出された諸遺構における本来の遺構面は現状よりもかなり上位になるものと推定される。

## 第IV章 発見された遺構と遺物

### 第1節 住居址

1号住居址（第4~6図、図版II・VI、第2・3表）

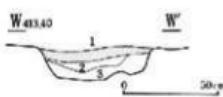
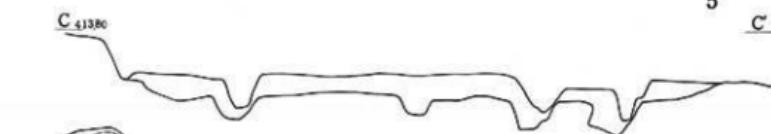
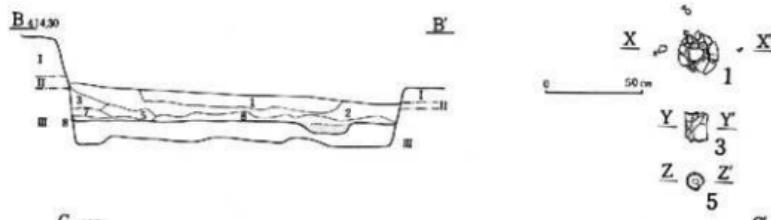
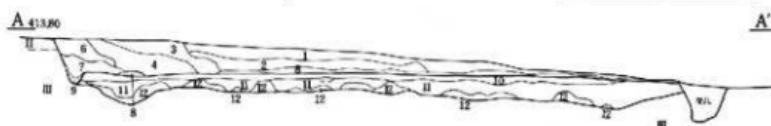
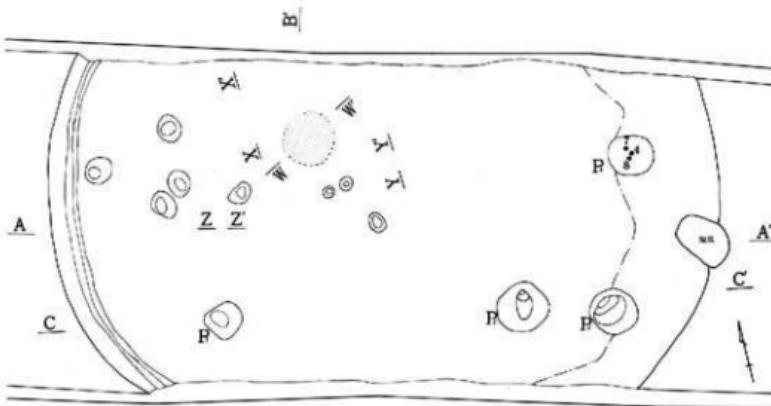
I区東半のA-3・4・5、B-3・4・5区に位置する。西2mに2号住居址が存在する。削平により東壁を破壊される。また道路巾の発掘であるため、住居址中央部を検出したのみである。

その為、平面形、規模、主軸方位等はあきらかにしないが、ほぼ隅丸方形を呈し、東一西で6m強を測るものと考えられる。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は西壁で40cmを有する。覆土は9層に分けられる、レンズ状の自然堆積を示し、全体的にローム粒の混入が認められる。

床面は堅緻な貼床だが西壁際は削平され遺存しない。

ピットは多數検出された。 $P_1 \sim P_4$ が支柱穴と考えられ、深さは $P_1=41\text{cm}$ 、 $P_2=36\text{cm}$ 、 $P_3=44\text{cm}$ 、 $P_4=51\text{cm}$ を測る。他に炉周辺に小ピット多数が認められる。尚、東壁中央部に認められるピットは、住居址壁を切って設けられており、住居址より新しい時期のものであろう。



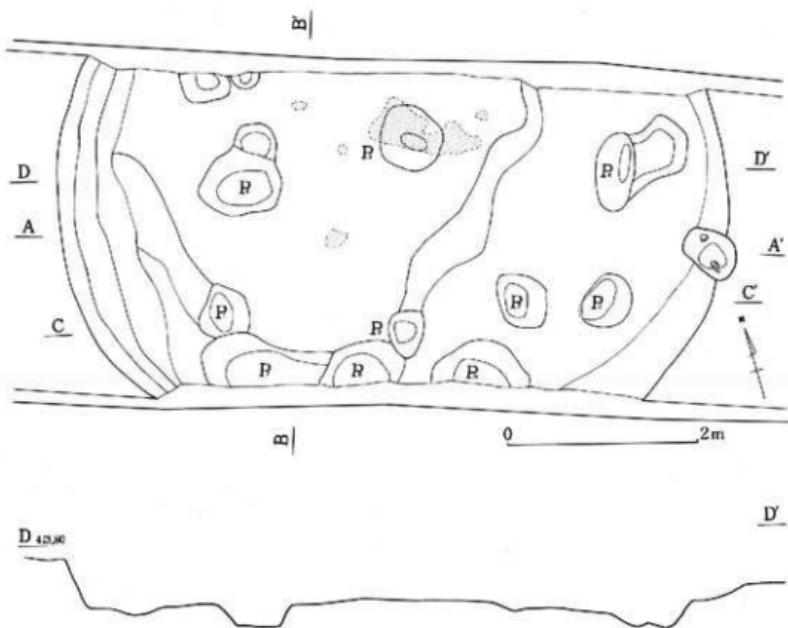
### 1号住居址

- 第1層：赤褐色土層（ローム粒を含む）
- 第2層：赤褐色土層（ローム粒、風化物を含む）
- 第3層：赤褐色土層（ロームブロックを含む）
- 第4層：赤褐色土層（ロームブロックを多量に含む）
- 第5層：赤褐色土層（ロームブロックを含む）
- 第6層：赤褐色土層
- 第7層：暗赤褐色土層（ロームブロックを多量に含む）
- 第8層：暗赤褐色土層（ロームブロックを多量に含む）
- 第9層：暗褐色土層（ロームブロックを含む）
- 第10層：暗褐色土層（黒褐色土経を含む）
- 第11層：暗褐色土層（黒褐色土経を含む）
- 第12層：黄褐色土層（ロームブロックを含む）

第4図 1号住居址、同炉址 [1/60、1/30]

### 1号住居址 炉址

- 第1層：棕褐色土層＝燒土ブロック
- 第2層：灰水褐色土層（燒土主体層）
- 第3層：黑茶褐色土層（ロームブロックを多量に含む）



第5図 1号住居址掘り方 [1/60]

炉は住居址中央やや西壁寄りに設けられる。径60cm程の不整円形を呈し、深さ20cm程の浅鉢状断面を示す。覆土は3層に分けられ上層には焼土ブロックが充填していた。

周溝は全周したものと思われ、巾15~20cm深さ10cm程を測る。断面形はほぼ台形を呈し底面は堅緻である。

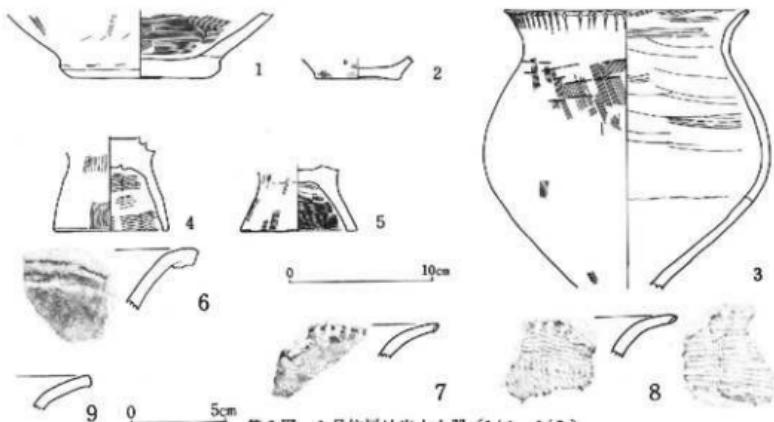
掘り方は中央が高く、壁際が深く掘り込まれ、床面からは8~15cm程を測る。埋土は4層に分けられ、第10層が貼床である。焼土溜が、住居址中央部、床面直下に認められた。

出土遺物は少ないが、床面からは炉周辺を中心として1,3,5が認められた。1は壺底部残欠であるが、炉脇に掘えられた状態で出土した。他は覆土下層から、4は掘り方内の出土である。

本址は一辺6mを超える住居址であるが、柱穴の配置、床下に認められた焼土などからは拡張住居址の可能性が窺える。東壁側へ拡張された住居址でP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>が拡張前の、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が拡張後の住居址に伴うものであろう。

第2表 1号住居址出土土器計測表

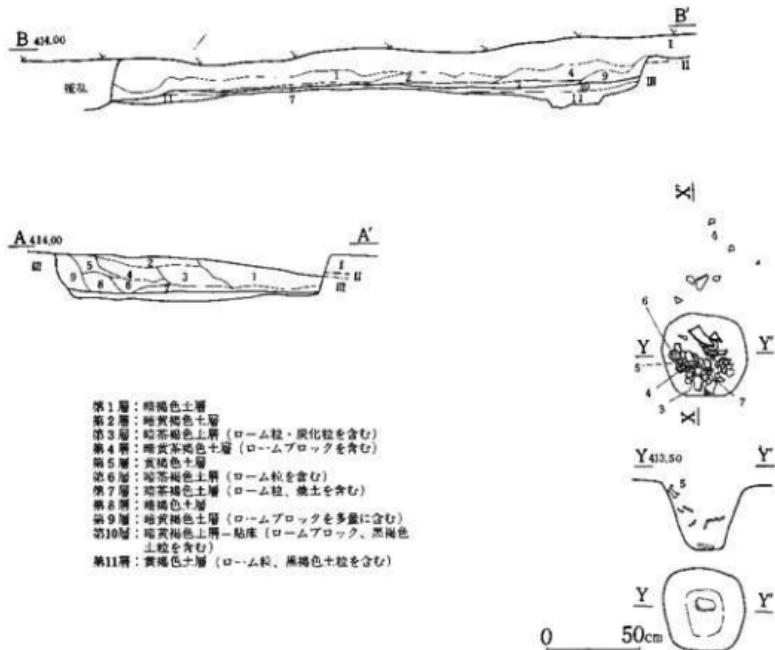
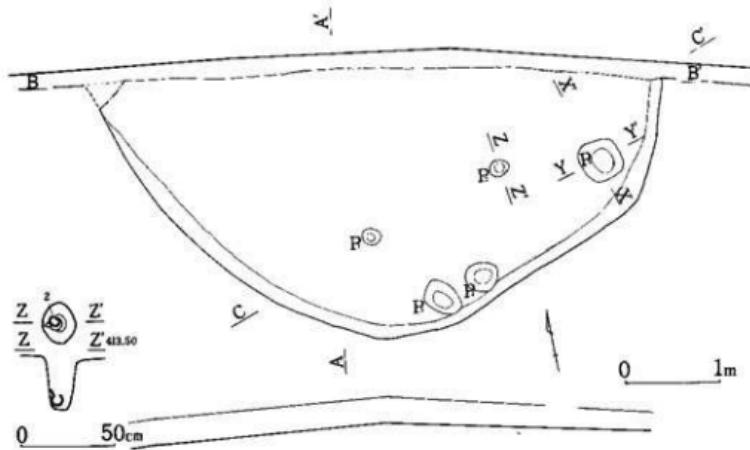
壺	甕
108個	720g



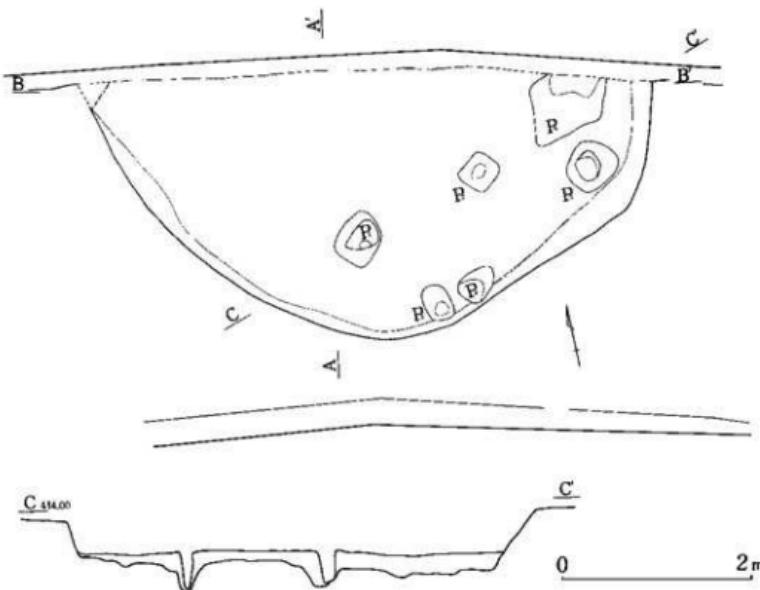
第6図 1号住居址出土土器〔1/4、1/3〕

第3表 1号住居址出土土器観察表

1 底 部	法量：底部径9.6cm。器高(4.5)cm。現存率：底部のみ完形。調整：外面一（ナデ）。内面一ハケ。底部一ナデ。胎土：白色粒含密。焼成：良好。色調：明赤褐色。
5 腰 脚台部	法量：底部径7.6cm。器高(6.6)cm。現存率：1/3。調整：外面一ハケ。内面一ハケ。胎土：白色粒含密。焼成：良好。色調：外淡赤褐色。内黒灰色。
3 腰	法量：口部径17.2cm。器高(19.5)cm。胴部最大径20cm。現存率：1/6。調整：外面一口唇部刻み。肩部胴部下半にハケ。内面一口縁部ハケ状工具を用いてのナデ。胴部上半ハケ状工具を用いてのナデ。胴部下半不明。胎土：白石粒含密。焼成：良好。色調：暗赤褐色。
4 底 部	法量：底部径8.2cm。器高(4.5)cm。現存率：1/10。調整：外面一ハケのちナデ。内面ハケ（中心部の周囲にクモの巣状のハケ）。胎土：白石粒含密。焼成：良好。色調：外淡黄褐色。内明赤褐色。
2 臺	法量：底部径5.6cm。器高(1.7)cm。現存率：3/5。調整：外面一（ハケのちミガキ）。内面一ミガキと思われる。底部一ミガキ。胎土：白色粒含密。焼成：良好。色調：明赤褐色。
6 壺	現存率：破片。調整：外一ハケ。内一不明。胎土：白色粒含密。焼成：普通。色調：淡赤褐色。
7 腰	現存率：破片。調整：外一ハケ。内一ミガキ。胎土：白色粒含密。焼成：良。色調：暗褐色。
8 腰	現存率：破片。調整：内外面ともにハケ（粗）。胎土：白色粒含密。焼成：良。色調：赤褐色。
9 壺	現存率：破片。調整：外一粗いタテハケ。内一（ハケのちミガキ）。口唇部一ナデ。胎土：白色粒含密。焼成：良。色調：淡赤褐色。



第7図 2号住居址・同貯蔵穴 [1/60、1/30]



第8図 2号住居址掘り方 [1/60]

**2号住居址** (第7~9図、図版II・VI、第4・5表)

I区中央部、A-5・6区に位置し、東2mに1号住居址が存在する。北半部が発掘区域外となるため、住居址の1/2弱を検出しえたのみである。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は東-西で5~5.5mを測る。主軸方位はN-25°-Wにとる。掘り込みはローム層まで達し、壁高は30~35cmを測る。覆土は9層に分けられレンズ状の自然堆積を示す。

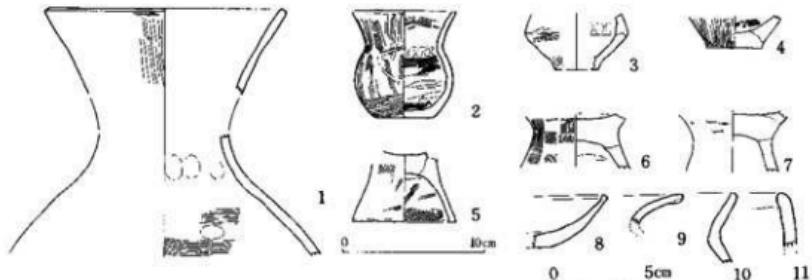
床面は堅緻な貼床で、住居址中央部が僅かに盛り上がりをみせる。また疎らであるが、焼土炭化物が全体的に散在する。ピットは5ヶ所検出された。 $P_1$ 、 $P_2$ が柱穴で、深さは $P_1$ -48cm、 $P_2$ -44cmを測る。 $P_3$ 、 $P_4$ は出入口施設と考えられ $P_3$ -13cm、 $P_4$ -12cmの深さを有する。 $P_5$ が貯藏穴で、一辺45cm程の隅丸方形を呈する。深さは35cmで深鉢形断面を呈し、内部から多数の土器片が出土した。周溝は認められない。炉は検出しえなかった。確認はされないが、発掘区域外に設けられたものであろう。

掘り方は床下全面に及び、壁際が深く掘り込まれる傾向を示す。床面からの深さは5~15cmを測る。埋土は2層に分けられ、第10層が貼床である。中央部は掘り方が浅く、掘り方底面に直接貼床がなされる。

出土遺物は少量だが、貯蔵穴内に集中して認められる。小壺2は柱穴( $P_2$ )底部から、すべり落ちた状態で出土した。貯蔵穴内中位～底部にかけて土器片多数が出土したが、接合するものは少なく、図示したものも僅か(3～7)である。他は覆土下層から出土している。

第4表 2号住居址出土土器片測定表

器	壺		甕	
	71個	660g	101個	885g



第9図 2号住居址出土土器(1/4, 1/3)

第5表 2号住居址出土土器観察表(1)

1	壺	法量：口部径16cm。器高(17.3)cm。現存率1/4。調整：マツツ著しい為調整不明。外口縁ミガキ。内面一頭～肩部指頭圧痕残す。胴部上半ハケ。胎土：白石粒多含密。焼成：不良。色調：赤褐色。
2	小型壺	法量：口部径7.3cm。底部径3.8cm。器高7.5cm。胴部最大径7.0cm。現存率：口縁部を2/3欠くが胴部～底部は完形。調整：外面一ハケのち粗いミガキ。内面一口縁ヨコハケ。頭～肩部指頭圧痕残す。胴部(ハケのちケズリ)。底部ナデ。胎土：極めて密。焼成：良。色調：淡黄褐色(黒斑あり)。
3	小型甕	現存率：破片。調整：外面一ミガキ。指によるオサエあり。内面一ヨコハケ。胎土：白石粒多含密。焼成：良。色調：暗赤褐色。黒斑あり。
4	小甕 底部	法量：底部径3.8cm。器高(2.3)cm。現存率：4/5。調整：外面一底部細かなミガキ。内面一底部中央は放射状のナデ。以上はヨコ方向のナデ(ハケ状工具を用いる為擦痕あり)。胎土：極めて密。焼成：良。色調：淡赤褐色。
5	甕 脚台部	法量：底部径7.2cm。器高(4.9)cm。現存率：完形。調整：外面一脚台部タテハケ。内面一脚台部ヨコハケ。胴部内面(底部)ミガキ。胎土：白色粒多含密。焼成：良。色調：赤褐色(黒斑あり)。
6	甕 脚台部	現存率：脚部のみ完。調整：外一細かいハケ。内一(ナデ)。胎土：白石粒多含密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
7	甕 脚台部	現存率：3/4。調整：外一ハケを残す。内一ハケを残す。胎土：白石粒多含密。焼成：良。色調：赤褐色。
8	鉢？	現存率：破片。調整：口唇部ナデ。外面一底部までミガキ。内面一指頭圧痕、ミガキ。胎土：白石粒多含密。焼成：良。色調：赤褐色。

第5表 2号住居址出土土器観察表(2)

9	縦 口縁	現存率：破片。調整：内外面ともハケ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：暗赤褐色
10	縦 口縁	現存率：破片。調整：口部にハケを残す。外面一口縁上部にヨコハケ（ナデあり）下部タテハケ。内面一口縁上部右上リナナメハケ。下部ヨコハケ。頸部指頭圧痕の左上リナナメハケ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：赤褐色。
11	鉢？	現存率：破片。調整：内外面ともミガキ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：暗赤褐色。

## 4号住居址 (第10~12図 図版III、第6・8表)

II区北端、D-23・24区に位置する。南東28mに6号住居址が存在し、5号住居址北半を切って構築される。北、東部に擾乱を受け、西半が発掘区域外となる為、住居址のごく一部を発掘したにすぎない。

4、5号住居址は、確認時には同一の住居址として認識しており、中央部にセクションベルトを設け、北半部をA区、南半部をB区として掘り下げを開始した。しかし、A、B区で約10cm程の床面のレベル差を確認し、また床面上からA区では多量の炭化材、焼土を検出したが、B区では全く認められなかった。その為、セクションベルトの一部を掘り下げたところベルト内から壁面を検出し、北半部の住居址が南半部の住居址を切って構築していることが判明した。従って、北半部A区を4号住居址、B区を5号住居址と命名した。

掘り込みはローム層中まで達するが、削半が激しく20cm程の壁高を残すのみである。覆土は3層に分けられ、最下層は炭化材、焼土主体層である。

床面は堅緻な貼床で、炭化材、焼土が多量に認められ、焼失住居であることを示している。ピットは2ヶ所検出された。深さはP-38cm、P-28cmを測る。炉はP脇に設けられる。長軸30cm程の楕円形平面を呈し、深さは10cmを測る。浅鉢状断面を示し、覆土は3層に分けられる。

周溝、貯藏穴は認められなかった。

掘り方は床下全面に及ぶ。中央が浅く壁際が深く掘り込まれ、なだらかな凹凸を持つ。埋土は2層に分けられ、第4層が貼床である。

遺物は少なく、全て覆土下層からの出土である。

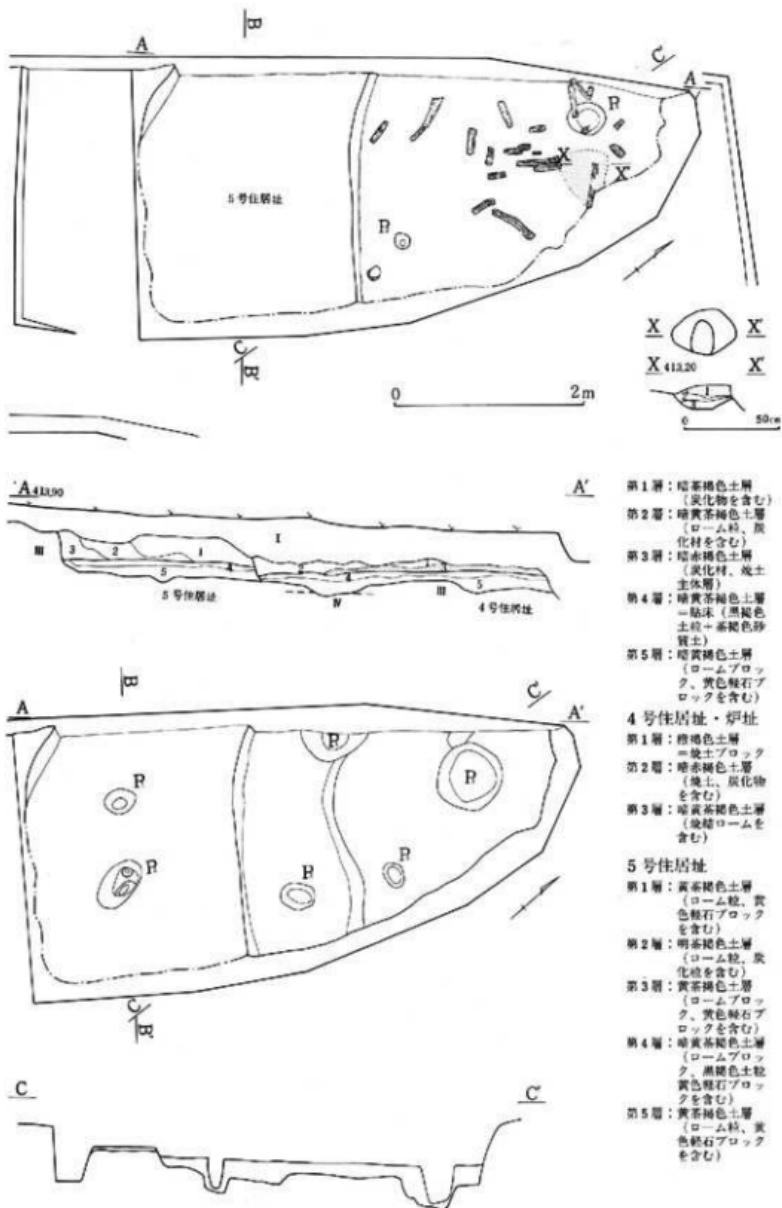
第6表 4号住居址出土土器計測表			
		壺	甌
37個	280g	148個	1,340g

## 5号住居址 (第10~11・13図、図版III、第7・9表)

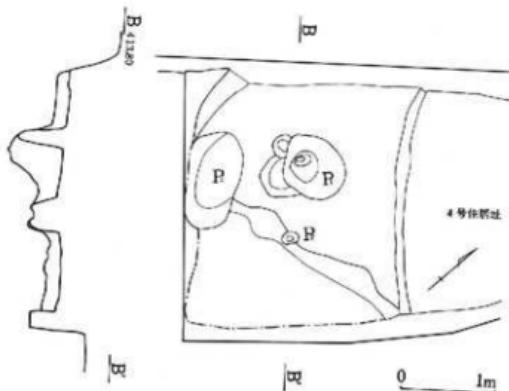
II区北端、24-D・E区に位置する。東、南部に擾乱を受け、北半を4号住居址に切られる。その為、住居址の一部を検出しえたにすぎない。

掘り込みはローム層中まで達する。壁高は30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

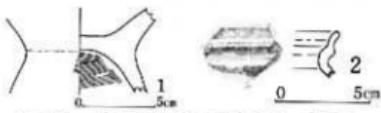
覆土は3層に分けられ、ローム粒、黄白色軽石粒が混入する。



第10図 4号住居址・同掘り方・同炉址及び5号住居址 [1/60, 1/30]



第11図 5号住居址掘り方 [1/60]



第12図 4号住居址出土土器 [1/4、1/3]

第8表 4号住居址出土土器観察表

1	甕 脚 部	現存率：完形。調整：マツメ著しく調整不明。脚部内面はハケ。胎土：白色粒含密。 焼成：良。色調：淡褐色。
2	S字甕 口 線	現存率：破片。調整：口縁部内外面ともナデ。外面—肩部タテハケ。内面—（指頭圧痕） 胎土：白石粒含密。焼成：普通。色調：淡赤褐色。



第13図 5号住居址出土土器 [1/3]

第9表 5号住居址出土土器観察表

1	甕 口 線	現存率：破片。調整：折り返し口縁。内外面マツメ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色 調：灰黄色。
2	甕 肩 部	現存率：破片。調整：外面一繩文。内面—上部ハケ。下部ミガキ。胎土：白石粒含密。 焼成：良。色調：淡赤褐色。

床面は堅緻な貼床である。  
ピットは2ヶ所検出され、深さはP<sub>1</sub>—53cm、P<sub>2</sub>—35cmを測る。周溝・貯藏穴・炉は検出できなかった。

掘り方は床下全面に及ぶ。  
底面の凹凸が激しく、底面にはピット(P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>)が設けられる。埋土は2層に分けられ  
第4層が貼床である。

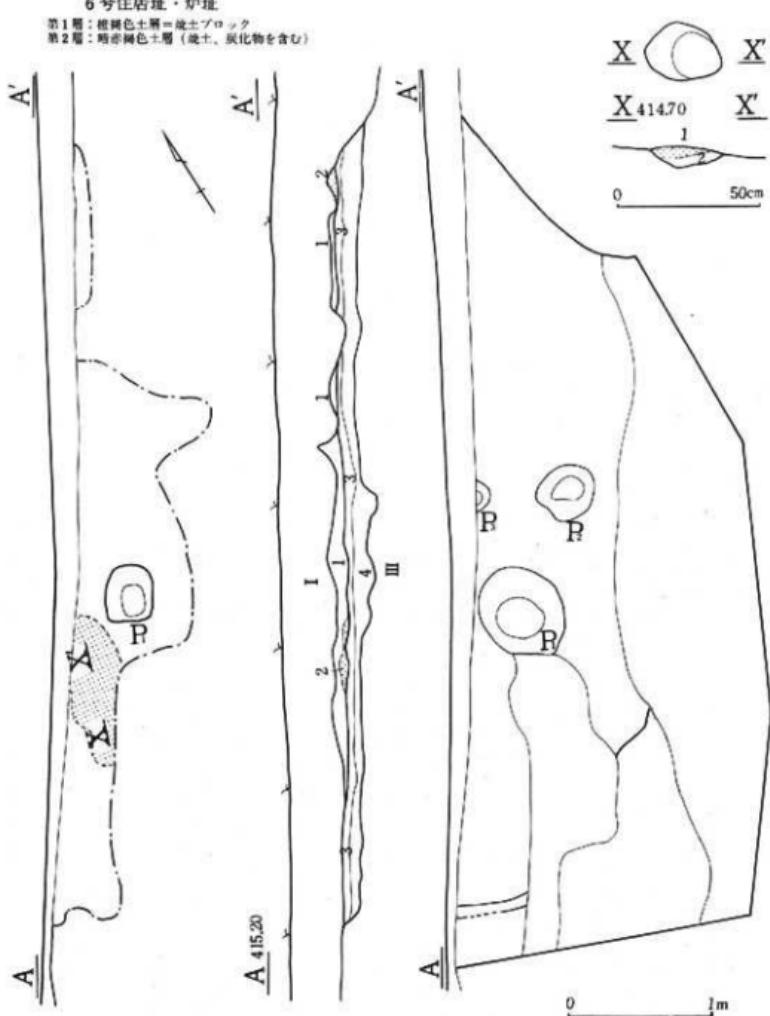
出土遺物は少なく、全て覆土下層からの出土である。

6号住居址

- 第1層：暗赤褐色土層（炭化物、焼土ブロックを多量に含む）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土土体層）
- 第3層：暗赤褐色土層—跡床（ロームブロック+黒褐色土粒）
- 第4層：黄褐色土層（ロームブロックを含む）

6号住居址・炉址

- 第1層：暗赤褐色土層=焼土ブロック
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土、炭化物を含む）



第14図 6号住居址、同掘り方、同炉址 [1/40, 1/20]

### 6号住居址 (第14~15図、図版IV、第10・11表)

II区中央、29-J・K区に位置する。北26mに4・5号住居址が重複して存在し、南3mには7号住居址が存在する。

耕作による擾乱の為、床面の一部を検出したのみである。

覆土も擾乱の為、2層しか確認できなかったが、焼土、炭化材を大量に含み、焼失住居の可能性が強い。

床面は貼床で遺存部分からの推定であるが、堅緻なつくりである。炉は25×20cm程の楕円形平面を呈し、深さ10cmで皿状断面を示す。覆土は2層に分けられ、第1層は焼土ブロックである。

掘り方は床下全面に及び、なだらかな凹凸に富む。

埋土は2層に分けられ、第3層が貼床である。

出土遺物は少なく、図示したのも僅かである。

第10表 6号住居址出土土器計測表

壺	甕	
	16個	210g
	28個	200g



第15図 6号住居址出土土器〔1/3〕

第11表 6号住居址出土土器観察表

1 口縁	壺	現存率：破片。調整：外面一不明。内面一無節繩文。折り返し繩文。胎土：白石粒含密
	焼成：良。色調：淡赤褐色。	
2 口縁	壺	現存率：破片。調整：外面一口縁部ナデ。以下ハケ。内面一擦りナデ。折り返し口縁。
	胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：暗褐色。	

### 7号住居址 (第16~19図、図版IV・VI・VII・VIII、第12・13表)

II区南半、L-29・30、M-30区に位置する。北3mに6号住居址が、南1.5mに8号住居址が隣接して存在する。

西半分が発掘区域外となり、南東コーナー部に擾乱を受ける為、住居址の約1/3程を検出したにすぎない。

平面形は隅丸方形と推定され、規模は南北で6m前後と考えられる。主軸方位はN-5°-W或いはN-85°-Eにとるものであろう。

掘り込みはローム層中までなされ、壁高は、25~30cmを有する。覆土は6層に分けられ、下層には炭化物、焼土が混入する。

床面は堅緻な貼床で中央部が僅かに盛り上がる。ピットは3ヶ所設けられる。Bは柱穴で、深

さは56cmを測る。 $P_3$ は貯蔵穴で径50cm程の隅丸形を呈する。深さは38cmを測り、深鉢状断面を有する。貯蔵穴周囲には、土堤状盛り上がり（凸堤）が弧状に付設されている。巾35~40cm、高さ5~8cm程を測る。外周には8~10cmの小ピットからばは等間隔に巡る。 $P_3$ は深さ12cmを有する。周溝は付設されない。炉址は検出しえなかつたが、未発掘部に付設されていたものであろう。

掘り方はほぼ全面に及ぶ。住居址南半部側が深く掘り込まれ、東壁際部では極端に浅くなる。深さは4~20cmを測る。埋土は2層に分けられ、第7層が階床である。底面はなめらかな凹凸を示す。

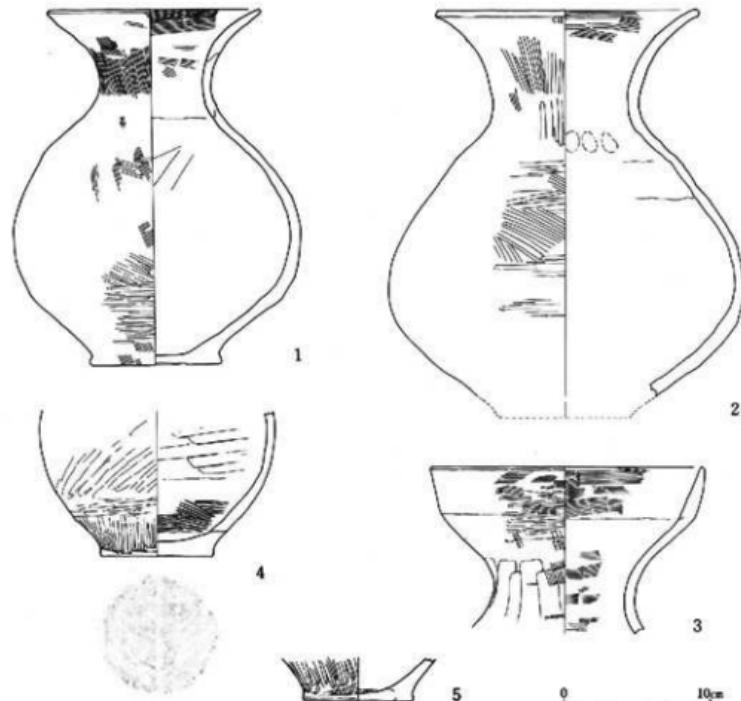
出土遺物は豊富で、全て床面からの出土である。貯蔵穴周囲の凸堤に沿って検出され、ほぼ原位置を保つものと考えられる。石製品12も床面から出土している。

第12表 7号住居址出土土器計測表

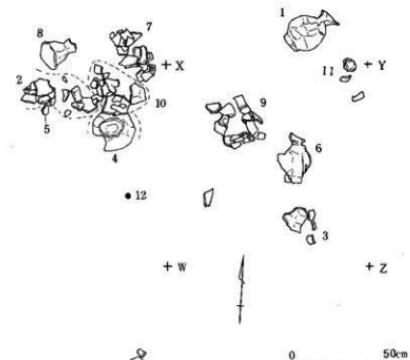
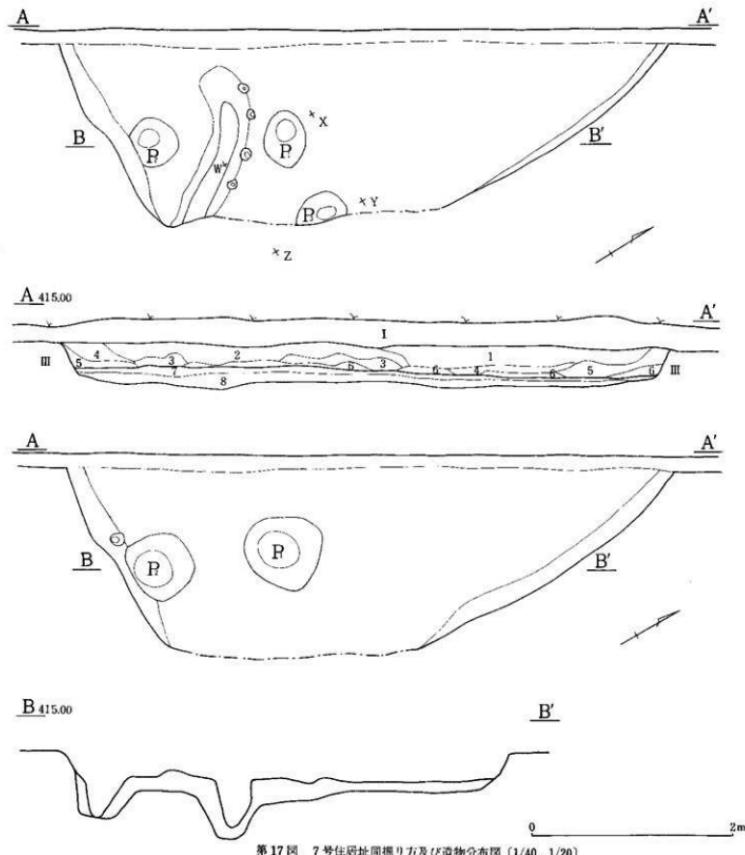
表	裏
150個	680g

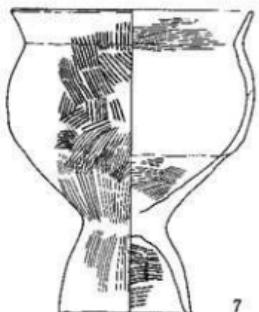
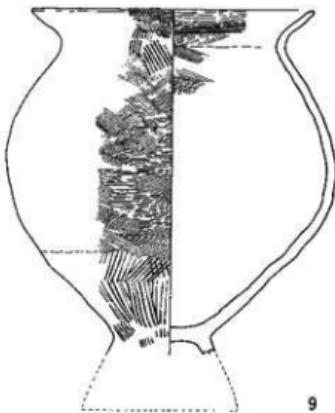
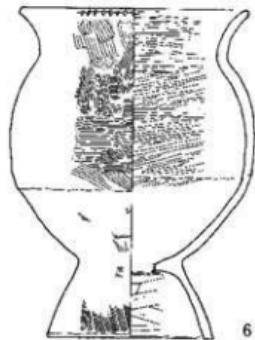
  

表	裏
113個	765g



第16図 7号住居址出土土器(1) (1/4)





第18図 7号住居址出土土器(2) [1/4]

第13表 7号住居址出土土器観察表(1)

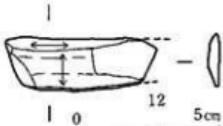
1	壺	法量：口部径15.0cm、底部径8.8cm。器高25.0cm。胴部最大径19.6cm。現存率9/10。調整： 外面—頸部にハケを明瞭に残すが基本的には全面ミガキあり。底部未調整に近い。内面 —口唇部細かいハケ。頸部（ハケのちミガキ）。胴部—底部ナデ。胎土：密（白石粒含） 焼成：良。色調：赤褐色（黒斑あり）。
---	---	---

第13表 7号住居址出土土器観察表(2)

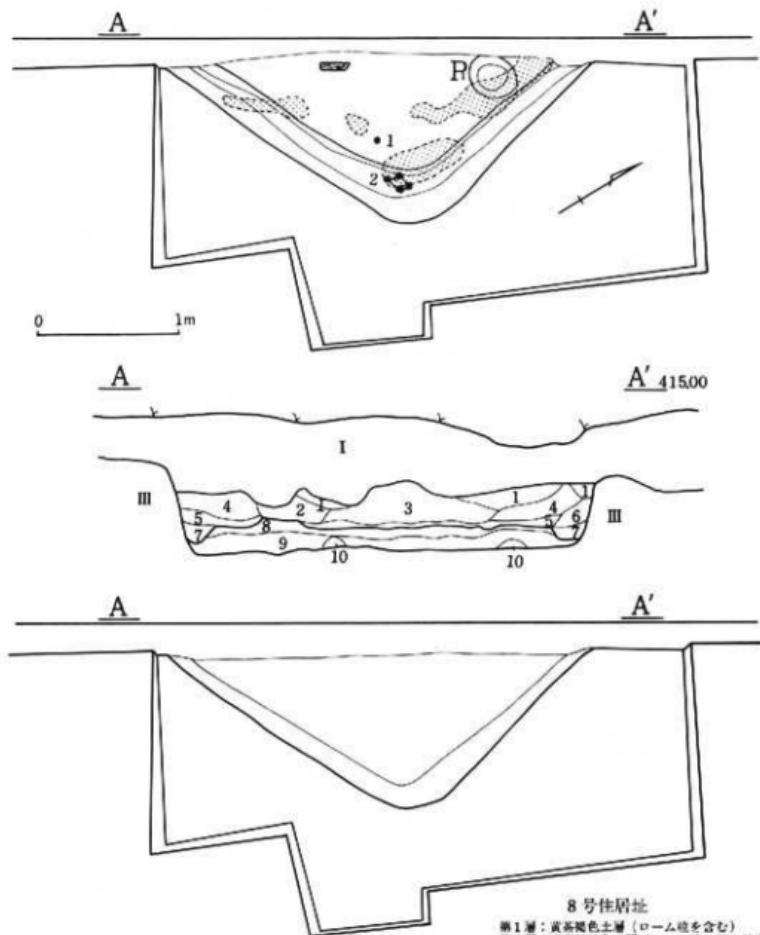
2	壺	法量：口部径17.8cm。底部径(9.0)cm。器高(28.5)cm。最大径24.8cm。現存率：3/4 調整：全面的にマメツしている為調整は不明である。外面一ハケのちミガキ。外面一ハケ。胎土：密（白石粒含）。焼成：不良。色調：暗赤褐色。
3	壺	法量：底部径7.8cm。器高(10.2)cm。胴部最大径16.5cm。現存率1/3。調整：外面一器面が粗れていて不明であるがミガキと思われる。内面一胴部中位ナデ。底部ハケ。胎土：密（白石粒含）。焼成：良。色調：淡灰褐色。
4	壺	法量：口部径18.6cm。器高(11.7)cm。現存率：完形。調整：外面一口縁部ハケのちミガキ。頸部ハケのちヘラナデによる面取り。内面一口縁～頸部ハケ。マメツ著しい。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：赤褐色。
5	壺	法量：底部径7.6cm。器高(2.0)cm。現存率1/3。調整：外面一ミガキ。内面一不明。胎土：密（白石粒含）。焼成：良。色調：淡赤褐色。
6	甕	法量：口部径15.4cm。底部径11.4cm。器高23.0cm。胴部最大径17.0cm。現存率：2/5。調整：外面一口縁～肩部細く深いハケのちタテハケ。一部に板状工具によるナデの擦痕に類似するハケあり。胴部下半ヨコハケ。脚部ハケの痕跡を残す。内面一面全面ミガキ。脚部板状工具によるナデ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
7	甕	法量：口部径16.6cm。底部径9.0cm。器高21.2cm。胴部最大径17.3cm。現存率：3/5。調整：外面一口縁～胴部上半はやや太いハケ。胴部中央附近に不整方向の細かいハケ。胴部下半～脚部粗いハケ。内面一口縁ハケ。胴部上半ナデ。下半ハケ。脚部粗いハケ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
8	甕	法量：口部径14.0cm。底部径7.8cm。器高13.3cm。現存率：完形。調整：外面一口縁～底部ハケのち全面ミガキ。脚部ハケのち全面ミガキ。内面一口縁～底部ハケのち全面ミガキ。脚部ハケ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：明赤褐色。
9	甕	法量：口部径19.4cm。底部径(12.0)cm。器高(28.0)cm。胴部最大径22.8cm。現存率：3/5。調整：外面一口唇部細かいタテハケ。頸部粗いハケ。胴部上半～下半やや下まで細かいハケ。胴部下半～脚にかけ粗いハケ。内面一細かいハケのち粗いハケ。胴部ハケと思われるが不明。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：暗赤褐色。
10	甕	法量：口部径13.8cm。器高(9.5)cm。胴部最大径13.5cm。現存率：2/5。調整：内外面ともマメツ。外面一口縁～肩部ハケ。胴部下半（ミガキ）。内面一口縁スリナデ。胎土：白石粒含密。焼成：良。色調：明赤褐色。
11	甕 脚 部	現存率：完形。調整：外面一マメツの為不明。内面一脚部ハケ。底部ナデ。胎土：密（白石粒含）。焼成：良。色調：暗赤褐色。

石製品 12は磨製石製品 現長5.3cm、幅1.8cm 厚さ0.4cmを測る。色調は黒色を示し、光沢を有する。一端は欠落するが平面は刀子状を、断面は台形状を呈する。縁辺部に稜を持つ。表、裏面共丁寧に研磨され、研磨方向は概ね横方向を走る。

貯蔵穴周囲を巡る凸堤北側床面から出土している。



第19図 7号住居址出土石製品(1/2)



第20図 8号住居址、同掘り方 [1/40]

**8号住居址 (第20~21図、図版IV、第14・15表)**

- 第1層：黄茶褐色土層（ローム粒を含む）
- 第2層：初黄茶褐色土層（ローム粒、焼土粒を含む）
- 第3層：黄茶褐色土層（ローム粒、焼土粒を含む）
- 第4層：黄茶褐色土層（ローム粒を含む）
- 第5層：黒茶褐色土層（炭化物、焼土粒を含む）
- 第6層：暗茶褐色土層（焼土粒を含む）
- 第7層：黄茶褐色土層（ローム粒を含む）
- 第8層：黄茶褐色土層—粘体（ロームブロック、黒褐色土粒）
- 第9層：暗茶褐色土層（ロームブロック黒褐色土粒を含む）
- 第10層：黄茶褐色土層（ロームブロック）

II区南端、30-M・N、31-N区に位置する。北1.5mに7号住居址が存在する。

大部分が発掘区域外となる為、南東コーナーの一部が確認できたにすぎない。平面形は隅丸方形と考えられるが、規模は明確にしえない。主軸方位はN-21°-W或いはN-69°-Eにとる。

掘り込みはローム層中まで達し、壁高は40~45cmを測る。覆土は6層に分けられる。下層には焼土、炭化材が多量に混入する。

床面は堅緻な貼床で、焼土、炭化材が多量に検出され、焼失住居であることを示している。周溝が認められ、巾20cm、深さ8~10cmで台形断面を示す。ピットは1ヶ所検出され深さは15cmを有する。炉、柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、未発掘部分に付設された可能性が強い。

掘り方は床下全面に及び、底面には凹凸が認められる。埋土は3層に分けられ、第7層が貼床である。

第14表 8号住居址出土土器計測表

出土遺物は少なく、図示したのも僅かであるが、全て床面からの出土である。

量	量
10個	50g
16個	300g



第21図 8号住居址出土土器 [1/4, 1/3]

第15表 8号住居址出土土器観察表

1 底 部	法量：底部径5.0cm。器高(1.7)cm。現存率1/4。調整：外面(ミガキ)底部ナデ。胎土：微石粒多密。焼成：良。色調：褐色。
2 底	法量：口部径21.6cm。器高(5.3)cm。現存率1/5。調整：外面一口斜部削み。ハケ。頭部細かいハケのち棒状工具によるナデ。肩部ハケ。内面一(擦りナデ)。胎土：密。焼成：良。色調：黒褐色。
3 脚 部	法量：底部径8.8cm。器高(5.7)cm。現存率1/3。調整：外面一ハケを残す。端部ナデ。内面：脚部ヨコハケ。底部ナデ。胎土：密。焼成：良。色調：赤褐色。
4 壺	現存率：破片。調整：外面一ヘラミガキ。内面一ヘラミガキ。胎土：白石粒多(雲母含)密。焼成：良。色調：外面一暗黄褐色。内面一(丹朱)。

3号住居址 (第22~24図、図版III、IV)

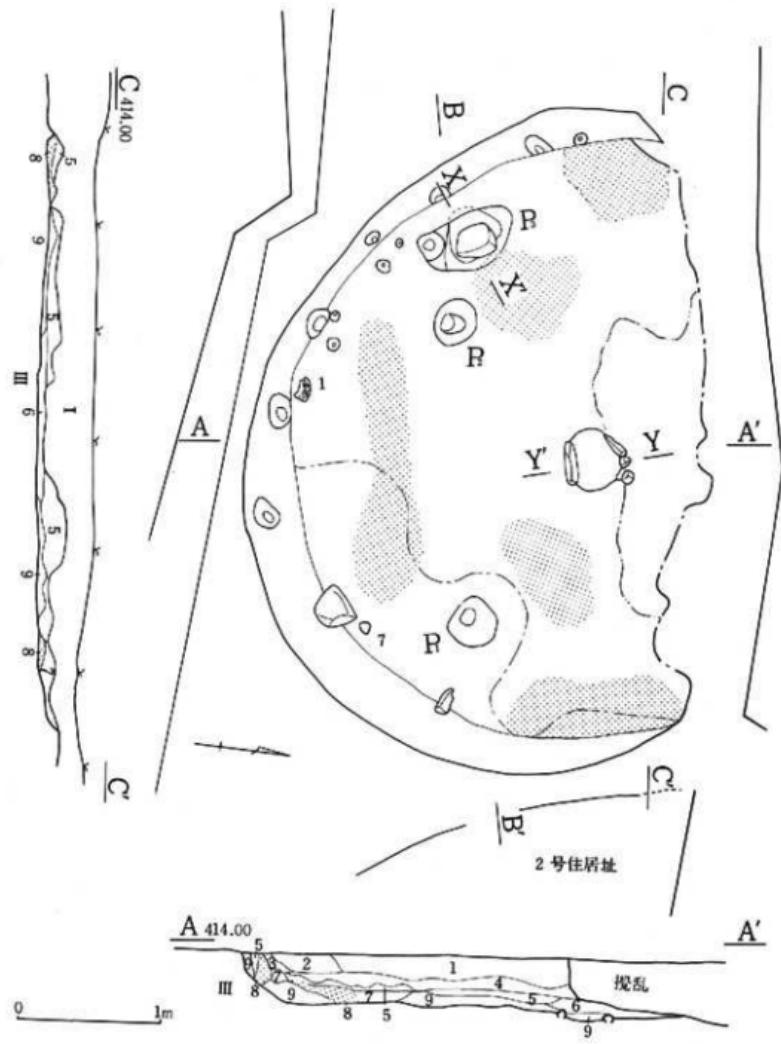
I区中央、7・8-A区に位置する。東に2号住居址が隣接し、西4mに1・2号土塙が並列する。

北半部を旧農道開設時に削平され、住居址南半部1/2強が遺存している。

平面形態は不整円形を呈し、規模は約4.5m程を測る。

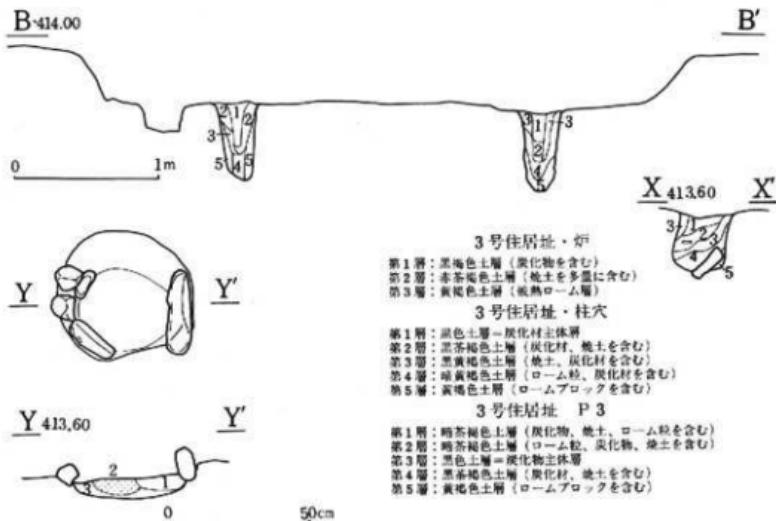
掘り込みはローム層中に達する。壁高は35cm程を測り、緩やかに内湾しつつ立ち上がる。覆土は9層に分けられ、壁際、床面上には炭化材、焼土ブロックが大量に認められる。

床面は固く踏み固められているが、南西部壁際がやや甘い。床面上には炭化材と焼土ブロックが厚く堆積していたが、炭化材の方向性は明確にえしなかった。



第22図 3号住居址 [1/40]

- 3号住居址
- 第1層：淡茶褐色土層（ローム粒、炭化物を含む）
  - 第2層：茶褐色土層（ローム粒、炭化物を含む）
  - 第3層：茶褐色土層（炭化物、灰土を含む）
  - 第4層：黄茶褐色土層（ローム粒、炭化物、灰土を含む）
  - 第5層：黑茶褐色土層（灰土、炭化物を多量に含む）
  - 第6層：黄褐色土層（ローム粒を含む）
  - 第7層：暗褐色土層（灰土土体層）
  - 第8層：暗褐色土層（灰土ブロック層）
  - 第9層：黑色土層（炭化物層）



第23図 3号住居址ピット、同炉址 [1/40, 1/20]

ピットは多数検出された。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>が主柱穴で深さは各々55cm、54cmを測る。焼失住居である為、柱痕が炭化材となって認められた。P<sub>3</sub>は二連ピットで深さは40cmを測る。ピット西壁（住居址壁側）は袋状に掘り込まれる。底部には25×20cm程の扁平な石がすべり落ちた状態で認められ、石直上には炭化材が堆積していた。從ってピット脇で使用されていたものが火災直前にすべり落ちたものと考えられる。周溝は認められないが西壁脚下部には小ピットが設けられている。

炉は住居址ほぼ中央に設けられる。径40cm程の不整円形平面を呈する石圓炉である。長角礫を主体とし、南北二辺に平行して配されている。炉上面にも炭化材が厚く堆積しており、本來の使用状態を示すものであろう。炉掘り方は長軸45cm程の楕円形平面を呈する。深さは8~10cmで、皿状断面を示す。覆土は3層に分けられる。

出土遺物は極端に少ない。深鉢底部1は南壁際床面から、磨石7は南東部壁際床面から出土した。他は全て炭化材上面からの出土である。南東部壁際には25×20cm程の扁平な石が床面に据えられており、出入口施設との関連を窺わせる。

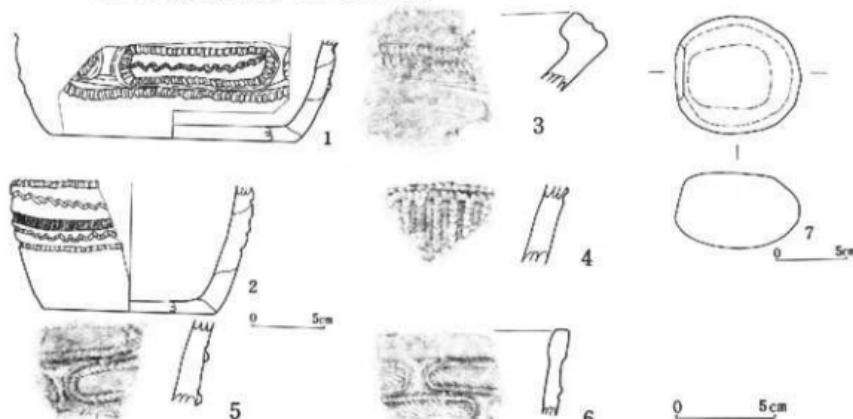
土器 1は残存高5.2cm、推定底径8.5cmを測る底部破片である。三角押文を特徴とし、胴部に至り重層する区画文を有する可能性が強い。2は角押文を多様する底径6.5cm残存高

9cmを測る底部破片である。底部には不明瞭であるが網代痕が認められる。3は口唇部に押引きの線文を有する浅鉢口縁部破片である。4は角押文を多用する脚部破片である。5・6は重層する楕円区画文を基本とし、三角押文を多用している。5は脚部破片。6は口縁部破片で、区画文内にR L 単節縄文を施す。

時期 1、2、3は本住居址床面出土で新道期所産のものである。4、5、6は同様に新道期所産であるが、本住居址の埋土中から検出されたものである。

石器 7は磨石である。ほぼ卵形を呈し、最大長8.5cm、幅8cm、厚さ5.3cm、重量480gを測る。石器のほぼ全面に亘って磨痕を残すが、特に側縁部に著しい。また側面から上面にかけて、炭化物の付着が認められる。

住居址南東部壁際床面から出土している。



第24図 3号住居址出土遺物 [1/4, 1/3]

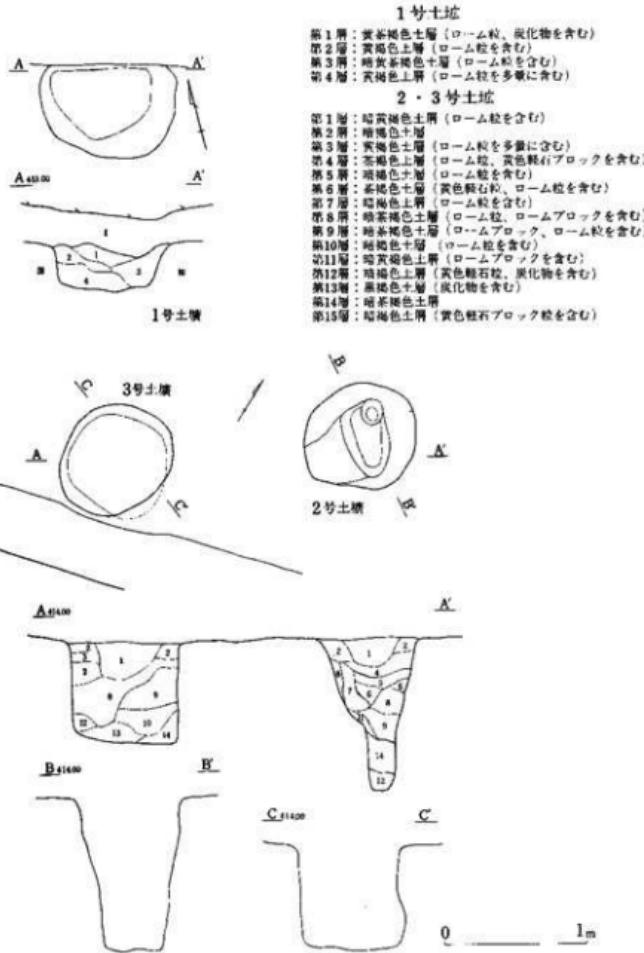
## 第2節 その他の遺構

### 1号土塙 (第25図、図版V)

I区中央、1-B区に位置し、北半部が発掘区域外となる。1×0.9m程の不整円形を呈するものと考えられる。深さは37cmで鍋底状を示す。底面には若干の凹凸が認められる。覆土は4層に分けられ、全体的にローム粒が混入する。遺物は認められない。

### 2号土塙 (第25図、図版V)

I区中央、9-A区に位置し、南西1mに3号土塙が存在する。0.8×0.9m程を測り、不整円形を呈する。深さは130cmで深鉢状断面をなす。底面は緩やかな凹状を呈し、北隅には小ピットが設けられる。覆土は12層に分けられ、上部ではローム粒の、下部では黄色軽石粒の混入が顕著



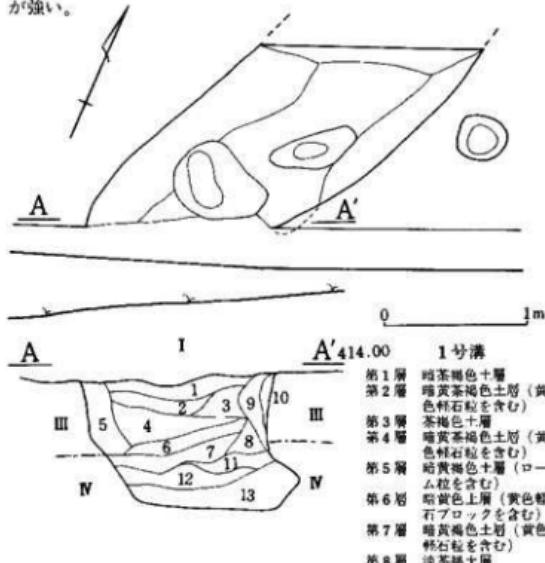
第25図 1号土塚及び2・3号土塚 (1/30)

である。遺物は認められない。

### 3号土塁 (第25図、図版V)

9-A・B区に位置し、北東1mに2号土塁が存在する。平面形は不整円形を呈し $0.8 \times 0.7$ mを測る。深さは78cmで、筒状断面を示し、南東隅はオーバーハングを呈する。覆土は9層に分けられ、中位から下位にかけて炭化物が混入する。遺物は出土していない。

2・3号土塁は約1mの距離で近接している。遺物が全く検出されない為、断定は避けねばならないが、形状、規模、覆土、掘り込み面等からは、性格、時期共に同一のものとしうる可能性が強い。



第25図 3号土塁 (3号土塁)

第26図 1号溝状遺構 (1/40)

窺わせるが、断定はしえない。遺物は出土していない。

### 第3節 遺構外の遺物

上ノ東遺跡は前述した様に非常に擾乱が著しかった。その為出土した遺物は少なく、また破損が激しい。図示したのも僅かであり、すべてII・北半部から出土したものである。

#### 縄文時代の遺物

1はRLの単節織文を有する胸部破片である。2は横帯区画文にヘラガキの沈線を有する胸部

### 1号溝状遺構

(第26図、図版V)

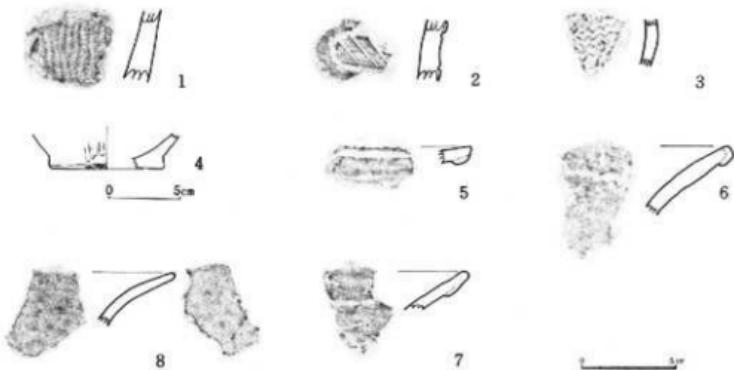
I区西端、13-B・C区に位置する。発掘区に斜行し、N-20°-Wに走るが、北半部は搅乱の為遺存しない。

幅1.5m、深さ0.9m程を測り、断面形は逆台形を呈する。東壁の一部はオーバーハング状を示す。

覆土は13層に分けられ、上層にはローム粒が、下層には黄色蛭石粒が混入する。

底面は硬くしまり、平坦であるが、ピットが2ヶ所設けられる。

溝東側に幅30cm程のピットが存在し、溝との関連を



第27図 遺構外出土の遺物〔1/4、1/3〕

破片である。3は山形文を有する押型文土器である。器厚6mmを測る薄手の破片で、胎土に纖維を含んでいる。1は新造期所産のもので、2は藤内期所産のものと考えられる。3は早期中葉の押型文系土器である。

#### 弥生時代の遺物

4は壺底部。底部径7.5cmを測る。外面はハケのちミガキ、底部はナデ。内面、ナデ。胎土は密。色調：暗褐色。焼成は良好。5～6は壺口縁部。全て折り返し口縁である。共に胎土は密。焼成は良好。5は外面はハケ、内面はミガキ。色調は赤褐色。6・7は内外面ともにマツツ。色調6は淡灰黒色、7は灰黄色、8は甕口縁部。外面、口唇部は擦りナデ。口縁部はハケのちミガキ。内面はハケ。胎土は密。色調は明赤褐色。焼成は良好。全て当地域に於ける弥生時代末から古墳時代初頭の所産であろう。

## 第V章 成果と課題

### 第1節 出土土器の様相について

本遺跡では、弥生時代終末に属すると考えられる土器群が検出された。住居址に伴う土器群であり、特に7号住居址出土の土器は1住居址の良好なセット資料である。本遺跡からは壺形土器、甕形土器の2器種が検出されたにすぎず、小形精製土器、高环形土器については破片すら認められなかった。

壺形土器は口縁部の形態により3分類される。単純口縁のもの（7-1、2）複合口縁のもの（7-3）折り返し口縁のものであるが、折り返し口縁の壺形土器は小破片であり、割合は少ない。また容量から、小形のもの（2-2）と中形のものとに2分類される。中形のものは最大径

形を胸部下位にもち、口縁から頸部、胴部への移行がゆるやかで、肩部が明瞭に確認できないものである。器面外面は、ミガキが施されているものが大半であるが、ところどころハケ目が残る。

壺形土器はいずれも台付壺形土器であり、口縁部形態から単純口縁のものと口縁端部に刻み目を有するものとに2分類される。更に中形のものと、小形のものと容量により2分類される。中形の壺形土器は胴部中位に最大径をもち、球形を呈する。小形のものは口縁部が最大径となり、単純口縁である。器面はいずれもハケ状工具による整形がなされている。

また4号住居址からは、S字状口縁台付壺の口縁部破片が1点検出された。

本遺跡から出土した土器群をもって時期決定することは困難であるので、本遺跡と対峙した丘陵に位置する六科丘遺跡出土の資料と比較検討を試みたい（註13）。本遺跡から高環等の器種が検出されなかったと同様、六科丘遺跡でも検出をみていない共通性がある。またS字状口縁土器の出土状況も同じであった。六科丘遺跡で試みた分類を用いると、六科丘遺跡の第Ⅲ期に属するものと考えられる。しかし、壺の形状を詳細にみると本遺跡7号住の壺は肩部が緩やかであり、六科丘遺跡の第Ⅲ期に先行する可能性も残されている。

本遺跡と八科山遺跡との器種欠如の共通性と、編成的位置づけは今後の課題となり、更に検討を重ねなければならないものである。

## 第2節 まとめにかえて

これまで述べた様に、上ノ東遺跡は弥生時代末～古墳時代初頭にかけての集落遺跡である。発掘区が道路巾である為、そのごく一部を発掘したにすぎない。また擾乱の為、7号住居址からセット関係を窺えるものが得られたにすぎない。従って遺跡の明確な年代観、或いは内容、性格に言及する段階にはない。

しかしながら、本遺跡の調査は当該地域における考古学、歴史学的研究の上で、多くの知見をもたらしたものといえる。上器の様相については前節に述べられた通りであるが、集落の位置関係においても、六科丘遺跡、上の山遺跡との関係が強く窺われる。詳細な検討は後日に期すとしても、同様な様相を示すほど同じ年代観を与えられる。六科丘遺跡とは、川を隔てて互いに向い合う地点に営まれている。また、同一丘陵上にはこれもほぼ同時期と考えられる上の山遺跡が存在し、その更に西方には方形周溝墓も確認されている。この様に市之瀬台地上に互いに望みあう地点に営まれるこれらの集落が、その関連性がどの程度のレベルであるかは明確にしえないとしても集落群として何らかの有機的結合をもっていたことは想像に難くない。

市之瀬台地に於ける考古学的調査の進展によって、これらの集落の内容、性格が更に明確にされ、これらの三者の関係性また集落と墓域との有様なども明らかにされよう。また、そのことは古地下の湧泉列上に並ぶと予想される遺跡群との関係をも含めて盆地内に於ける弥生時代末か

ら古墳時代へと至る社会的、政治的動向を明らかにする上で、聊かの寄与をなしえるものであろう。

- 註1 本遺跡から小谷を隔てて一段下った塚原字東原から弥生時代末期土器が多数採集されている。実査による。
- 註2 1981 住吉遺跡 住吉遺跡調査団 甲西町教育委員会
- 註3 1981 全国遺跡地図-19 山梨県 文化庁文化財保護部 國土地理協会
- 註4 清水遺跡 1985年度に甲西町教育委員会によって発掘調査がなされている。
- 註5 1985 上の山遺跡 柳形町教育委員会
- 註6 1985 六糸丘遺跡 六糸山遺跡調査団 柳形町教育委員会
- 註7 若草町地籍内では湧泉列上の微高地を中心として五領期を主体とする遺物散布地が、100ヶ所以上確認されている。保坂氏（県埋文センター）佐野氏（小淵沢町教育委員会）の御教示による。
- 註8 1983 物見塚 物見塚古墳環境整備調査委員会 柳形町教育委員会
- 註9 註6に同じ
- 註10 1973 甲西町誌 甲西町誌編纂委員会 甲西町教育委員会
- 註11 1966 柳形町誌 柳形町誌編纂委員会 柳形町教育委員会
- 註12 1980 日本城郭大系 第八巻 湯本軍一・磯貝正義
- 註13 註6に同じ

図版 I



遺跡遠景



上の山遺跡より



六科丘遺跡より



発掘参加者

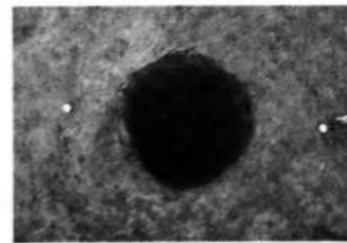
図版 II



1号住居址



2号住居址



2号住 P 2 (柱穴)



2号住 P 5 (貯藏穴)

図版 III



3号住居址



3号住 土層セクション

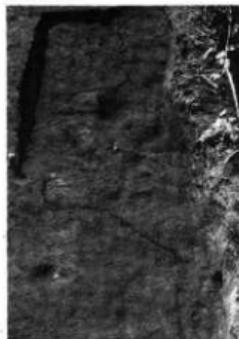


3号住 炉址



4・5号住居址

图版 IV



6号住居址



7号住土器出土状况

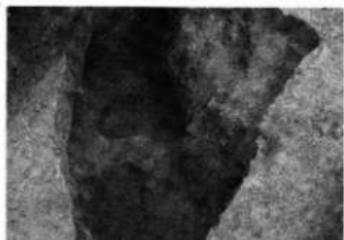


7号住居址

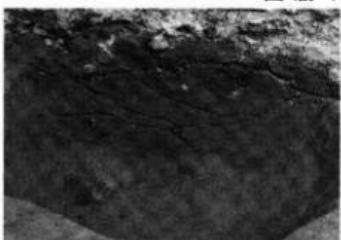


8号住居址

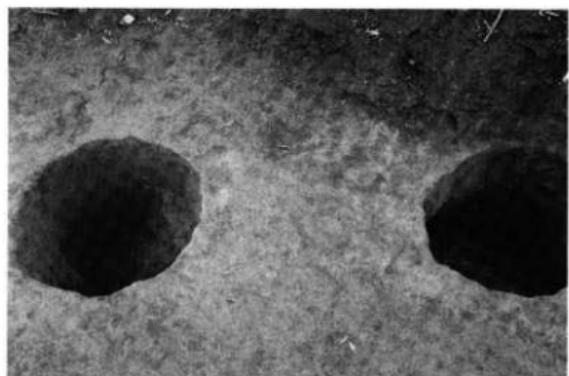
図版 V



1号 溝



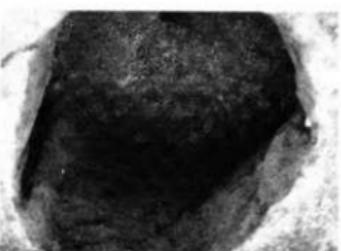
1号 土 塚



2・3号 土 塚



2号 土 塚



3号 土 塚

図版 VI



1 - 1



1 - 3



1 - 4



1 - 5



2 - 2



2 - 5



7 - 9



7 - 8



7 - 10

図版 VII



7-1



7-2



7-3



7-4



7-6



7-7

図版 VII



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7



7-12

甲西町文化財調査報告

## 上ノ東遺跡

---

—甲西町塚原上ノ東遺跡発掘調査報告書—

昭和61年3月15日 印刷

昭和61年3月20日 発行

編集・発行 甲西町教育委員会

印刷 御有泉堂印刷所

---

